日本型リゾートについての意識調査とその分析

京都大学工学部　　宮田　浩幸
京都大学工学部　正員　　川崎　雅史
京都大学工学部　正員　○秋山　孝正
京都大学工学部　正員　　佐佐木　綱

1．研究の背景と目的

近年わが国において長期的好景気を背景に豊かな国民生活を目指し、民間活力を導入した過疎地域の活性化に役立つ滞在型のリゾートが全国的規模で実施される機運が高まってきた。このような展開はいわば、開発が新たな需要を引き起こすという企業側の問題として理解でき、特にリゾート開発は新たに注目すべき活動とされている。このようなことから、現実に開発、計画されている各種は基本的に大規模総合的な開発が主流であるといえる。しかしこうした企業中心の開発は一過性のレジャーを喚起することに終始する可能性があり、こうして開発されたリゾートが、必ずしも長期的に存在できるかどうかは疑わしいと思われる。そこで、本研究においては、現状の大規模開発的なリゾート地に対して、補完的な役割を持たせるための、日本型のリゾートとして長期的であり風土に適したリゾート開発理念を見いだすことを目的とする。この意味で効率最大化、経済的価値の最大化などのいわゆる最適戦略としてのリゾート開発とは異なった視点を考えている。具体的には以下の手順による検討を行った。

（1）現行の総合レジャーランド的な開発の側面からは網羅することの難しい、新たなリゾート視点の分析を行った。このとき現行の大規模開発が基本的に西洋型の避暑地開発と同様の発想で行われていることに問題がある。そこで、西洋的なリゾートに関する理念とそれに対応する日本的な価値観を見いだすことに主眼をおき分析を行った。

（2）意識の側面から現象分析を行うとともに、新たな日本のリゾート整備理念について考察を行った。ここでは基本的理念として掲げたいくつかの点を実証的に解明するためにアンケート調査を実施しその結果に考察を加えた。従来と同様な意見収集では不十分であり、とくに「滞在型」「日本的意識」を反映したリゾートを見いだすことを目指した。

（3）具体的にこれらの整備理念を計画あるいは開発していくうえでの施設整備等への検討を行った。この場合特に、外国人に対して意見抽出を行った結果を用いて検討した。

2．各視点からのコンセプト

リゾートに関する理念形成という意味で各視点から既存形式のリゾートに対して今後望まれる方向性を以下のよう抽出した。これらは、既存の文献、資料の調査により取りまとめたものである。

①労働観からみた日本型リゾート：「労働」に対置するものに「余暇」が存在する欧米式の労働観に対し、わが国には「余暇」を「労働」とは無関係なものあるいは、いはゆる「休養」と同義としてとらえる場合が多いといえる。こうした労働観の相違はリゾート開発にも関係し、わが国においては基本的に「仕事への支障の有無を考慮できる形」のリゾートの必要性がここから示唆されよう。

②宗教的価値観からみたリゾート：キリスト教社会においては、日常的な労働を回避することへの欲求に西欧人のリゾート志向の原点があるのではないかということが示唆される。

③生活様式からみた日本型リゾート：ライフステージの違いにより活動形態が異なるため、当然年齢層により一般の余暇活動は変わっていくと考えられる。これに対し、現状のリゾート開発は、ライフステージに関する考慮が欠如している場合や、商業的理由から特定年齢層を中心とした要求のみに対応する場合（若年層のためにレジャー・スポーツ施設）が多いと思われ、今後の社会の高齢化、あるいは多様化に対してさらに検討の余地があるといえる。

3．アンケート調査とその結果

さきに示した検討手順に従い、また上記のコンセプトに関する調査結果を踏まえて、「リゾート」に

Hiroyiki MIYATA, Masashi KAWASAKI,
Takamasa AKIYAMA and Tsuna SASAKI

関する意識調査を行った。この調査は、各個人のリゾート活動の実態を知るとともに、今後期待されるリゾート形態の方向性を導出するためのものである。

調査は総て筆答式で行い、６９サンプルが得られた。（年齢、家族構成なども比較的広範囲である。）この調査結果の代表的な部分を示す。図－１はリゾート活動の「現状」と「将来への希望」を示すものである。

本図から現在行っている余暇活動は比較的屋内中心の静的・受動的な活動が多いことがわかる。また、その他の調査結果からも、これに対し屋外における積極的・行動的な活動を現在は行えていないが、これからやっていきたいといった意見が多数見られた。また自己開発型の余暇活動を行いたいという意見も多くみられた。このようなアンケート調査結果から示唆されるリゾート形態はつぎのようである。

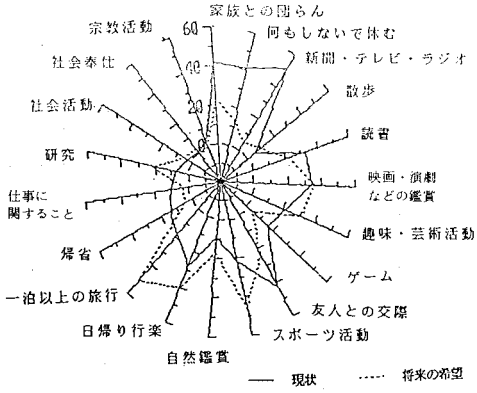
①「時間的ゆとり」の不足から、アクセスの便利な近郊立地型リゾート
②スポーツ・娯楽」中心のリゾートだけではなく、教育・文化的施設を併せもったリゾート
③自然を利用したリゾート
④「心のやすらぎ」を満たすことのできるリゾート
⑤日常生活の行えるリゾート

つぎに本研究では、同様のアンケートを外国人数名に対して行い、日本のリゾートに対する意見を抽出した。外国人の目から見た日本のリゾートは以下のようなものとされている。

①日本のリゾートはお金がかかる。
②日本のリゾートは規格化され、整備され過ぎている。
③スペース的に狭く、ゆったりとするのに十分な設備が足りない。
④日本のリゾートは非常に混んでいてゴミゴミしている。
⑤リゾートでグループ行動している日本人が多い。
⑥フォーマルなスーツやきれいな服を着て着飾っている日本人が多い。

４．おわりに

具体的な新しいタイプの日本型リゾートを模索して、特に開発上重要となる施設、機能面からの検討を行った。この際、欧米型の開発が必ずしも日本の風土に適したものとはいい難いという視点から、まず外国人（欧米人中心）に対する意識調査結果を主として分析した。外国人と日本人のリゾートに対する意識の相違は、いくつかの代表的な点を挙げることができ、たとえば欧米人は「リゾートを生活様式の一部として考えており」、「地理的、気候的な条件を考慮したスポーツなどを行い」、「長期的な休暇を基本として考えている」といえ、これに対して、日本人の場合経済的な「豊かさ」は、昨今十分に保証される時代ではあるが「なお比較的長い労働時間を持ち」、「新たな仕事のための休養を求める」という構造は大きく変化していないようである。この意味で、既存の大規模なレジャーランド的開発は、余裕時間の多い若年層を対象としたものと考えることができる。もちろん新たな産業基盤としてのリゾート開発を考えると、このように最も活動的な世代を対象とした開発は、経済的合理性も持つであろうが、国民性に合致した新しいタイプのリゾートの必要性も今後考えるべき視点である。したがって、本研究で示したようなリゾート開発理念を新たに導出するためには、一般的なリゾート開発手順を踏襲するとともに、新たな視点の組み込まれるべき側面を見いだす必要がある。



図－１　リゾート活動の現状と将来の希望

本研究で提案した日本型リゾートのタイプは「定住的であり、そのために地域特性を生かした開発を行う」、「施設対応ではなく、自然を生かした文化的価値をもつ」、「機能的には日常生活と逸脱しない施設をもった比較的アーバンリゾートに近い形式」などの点が中心的である。今後このような、風土的であり、定住的でありさらに文化的な魅力あるリゾート開発が新たなひとつの理念として挙げられよう。